非戦を選ぶ演劇人の会　ピースリーディングＶＯＬ．１４

核・ヒバク・人間

構成台本　非戦を選ぶ演劇人の会

相馬杜宇・石原燃・篠原久美子・清水弥生・野中友博・丸尾聡

演出　鵜山仁

演出補　永井愛・丸尾聡

二〇一一年八月二七日・二八日　全労済ホール／スペース・ゼロ

登場人物

【フクシマ】

横山茂
神谷さだ子
タチアーナ・ブジリーナ
患者
事務局長
加藤丈典
被災者１～３
吉岡医師
福永看護師
佐藤医師
篠原
長谷川健一
職員
農家の女性
福島出身、東京在住の女性
山下俊一
福島市の主婦
近藤誠

【原発と地域振興】

高木市長
開沼博

【安全神話】

東電社員１～３
原子力産業会議顧問
小出裕章
電気事業連合会役員
プルト君
医師
看護婦１、２
原子力安全委員会１～３
高木仁三郎
電力会社
広瀬隆
石原慎太郎
中村政雄
碧海酉癸
木元教子
東嶋和子
調査団
池澤夏樹
高橋哲也

【原発労働者】

坂本正之
作業員Ａ
弁護士
二次下請けの正社員
現場作業員Ｂ
厚労省役人
樋口健二
岩佐嘉寿幸
堀江邦夫
労働者１、２
センターの人
専務理事
嶋橋美智子
小野七生医師
中部電力
森瀧市郎

【ウラン鉱山】

森瀧市郎
シェリル・ブハナン
イヴォンヌ・マルガルラ
ミラー族の民
森瀧春子
ウラン鉱山労働者
ヘネリック・アウェセブ
ラインハルト・ノワセブ
ジェームズ・ディノ

【劣化ウランとプルトニウム】

佐藤真紀
田城明
マイク・ステイシー
ショアンナ
マルコム・フーパー
フィラス・アブダル・アバス
女性看護師
モハメッド
矢ヶ崎克馬
友清裕昭
常石敬一
高橋巌
池澤夏樹
高木仁三郎
バラク・オバマ

【核管理社会】

小出裕章
宮台真司
高木仁三郎
高橋哲哉
アボリジニの長老１～３
ＷＡＮＦＡ１～１２

【エピローグ】

解説者

フクシマ

客電が消えると、闇。
暗闇の中から、密やかな音楽。
現れてくる、密やかな舞台。
そこに俳優たちの存在がある。
密やかに。

解説者　三月十一日、一四時四六分一八秒。宮城県牡鹿（おが）半島沖を震源とした、地震発生。高さ十メートルにも及ぶ津波を観測。

解説者　津波から逃れて山で一夜を過ごした横山茂（よこやましげる）さん。

横山　夜になって山から町のあったところを眺めても、どこにも灯りが見えない。ふと空を見上げると、真っ暗な夜空に、星がものすごく美しくてなぁ。こんなきれいな星空は見たことないって、震えながら、ずーっと、空、見上げてた…。

解説者　三月十二日、十五時三十分、福島第一原発第一号機で水素爆発。

解説者　三月十四日、十一時一分。第一原発三号機で爆発。

解説者　三月十五日、第一原発四号機で火災。

解説者　この日、福島に雪が降った。

解説者　震えながら見あげた美しい空に、

解説者　放射性物質が、舞った。

音楽、消える。
舞台、スッ、と明るくなる。

解説者　二〇一一年三月十二日夕方、日本チェルノブイリ連帯基金、ＪＣＦの事務局長、神谷（かみや）さだ子さんの電話が鳴った。モスクワからの電話だった。

ターニャ　神谷さん、大丈夫ですか？　ＪＣＦのスタッフの皆さんは？　大丈夫？

解説者　電話の主は、タチアーナ・ブジリーナさん。ベラルーシ、ゴメリ、チェチェルスクのなどの、放射線測定技士だった。

解説者　チェルノブイリの事故では二百キロ近く離れた土地でも大気に拡散した放射性物質が風に運ばれて落ち、原発近くのゾーンと同じくらい汚染された。

解説者　タチアーナさんは測定器で土壌の定点観測をし、食べ物の汚染調査をし続けた女性だ。

ターニャ　私たちにとって、チェルノブイリの事故は初めての経験でした。何をどうしたらいいのか全く分からなかったのです。そこへ、ヒロシマ・ナガサキを経験した日本人が支援に来てくれた！

神谷　当時、彼女はそう言って、ＪＣＦに協力してくれました。子どもたちの健康診断などの活動を手伝ってくれたのです。当時は、ヒロシマ・ナガサキを経験した日本人がチェルノブイリを心配した。なのに、今、チェルノブイリを経験した彼女が、日本の私たちを心配し、電話をかけてくれている…。なんだか無性に情けなく、切なかった。

テレビの中で繰り返される、「これは、ただちに人体に影響を与える数値ではありません。」という言葉に、私は暗澹とした気持ちになりました。低線量被曝について、知識が何もないのでしょうか。

解説者　空間中の放射線量が低い場合、外部被曝においては確かに人体に影響を与えることはない。

解説者　外部被曝とは、放射性物質を手にしたり近付いたりして放射線を浴びる事をいう。

解説者　それに対して、放射性物質を含む水や食べ物を飲み込んだり、呼吸によって放射性物質の微粒子を吸い込む事を内部被曝と呼ぶ。

神谷　たとえ低い線量であっても、内部被曝によって体内に取り込まれた放射性微粒子は、ＤＮＡを損傷するおそれがあるというのに。特に乳幼児や児童、これから妊娠する可能性のある女性達は、気をつけなければならないのに。

解説者　三月十四日、ＪＣＦに、福島県南相馬（みなみそうま）市立病院から連絡が入った。

南相馬市立病院長　液体酸素が底をついてきた。酸素吸入している患者が大変なことになる。薬も食料も足りない。助けてもらえないか。

解説者　南相馬市は原発から約二十三キロ。自主避難区域に指定されたため、ガソリン、食料品、医薬品も入ってこない。ユーチューブで桜井市長が悲痛な声を上げていた。汚染度は比較的低いにもかかわらず、同心円で括られたために、住民は戸惑い、生活にも支障を来していた。

神谷　私たちは、怖じ気づくことはありませんでした。それを、チェルノブイリの経験と、一言で言ってしまうのは悲しいことですが。でも、私たちには、汚染の高い地域で、そこに住む住民のために医療活動を続けている、ベトカ地区病院長のような友人がいます。地図から消され、埋葬されてしまった故郷の村に住み続けている人々のなかにも、知人や友人たちがいて、繋がっています。南相馬の方々を応援するために、できる限りのことをしようと思いました。

解説者　様々な医薬品や支援物資を積み込んだ４トントラックの荷台は、すぐに満載になった。トイレットペーパー、紙おむつ、レトルト食品、雨合羽などまで積み込んだ、ＪＣＦの第一次派遣団は、二十一日０時、諏訪中央病院の医師や看護師達を乗せて、南相馬総合病院に向かった。

神谷　私たちは、一時間ごとに簡易測定器で線量をチェックしていましたが、高速を降りて飯舘村（いいたてむら）付近の道路にさしかかったとき、九・九九マイクロシーベルトが上限の測定器が振り切れました。ここは三十キロ圏外になるというのに、風に乗った放射性物質が、ここまで運ばれてきているのだと思いました。

解説者　ＪＣＦのトラックが南相馬総合病院に到着したのは、朝八時。百七十七名の入院患者を福島県外に搬送し終わった直後だった。病院の医師や看護師達も大勢避難した後で、残ったスタッフが不眠不休で働いていた。

解説者　諏訪中央病院医療チームは、すばやく引継ぎを済ませ、すぐに外来に入った。

解説者　市内で、薬を処方する窓口は、ここ一箇所しかなかった。

解説者　その唯一の窓口が、開いた。

解説者　殺到する患者さんたち。

解説者　普段は別の病院に通っていた方、

解説者　保険証を持っていない方、

神谷　そういう方々にも、一週間分の薬が処方されました。そのなかのある患者さんが、私にこう質問してこられました。

患者　あの、一週間後、この病院は、やってますか？

神谷　私は言葉を失いました。病院の事務局長さんに問い合わせてみましたが、

事務局長　一週間先のことは、私たちにも分かりません。

神谷　事務局長さんでさえ、そうとしか答えられない状況でした。受付業務を手伝いながら、お薬を待つ方々の声が聞こえてきます。動くに動けない事情、これから行く先での不安などを、お互いに訴えあう方たち。そういう患者さんたちで、病院はいっぱいでした。

解説者　ＪＣＦのスタッフと医療チームは、午後からは、地元の先生の案内で避難所の健康診断を行った。

神谷　避難所になっている第一小学校、鹿島中学校の体育館には、それぞれに七十から八十名くらいの方々が毛布にくるまっていました。

解説者　午前中は南相馬市立病院での外来、午後は避難所での検診。休む間もなく続くその仕事が三回まわる頃、ＪＣＦスタッフと医療チームの第二次支援隊が、諏訪を出発した。

解説者　第二陣のＪＣＦスタッフ、加藤丈典（かとうたけのり）さんは、震災の第一報を、イラクで聞いた。

加藤　信じられませんでした。これが本当に日本で起こっていることなのか。原発事故のニュースは、あまりにも衝撃的でした。

解説者　加藤さんは、急遽、イラクから帰国し、南相馬市の緊急医療・食糧支援の第二次支援隊に加わった。ＪＣＦの鎌田實（かまたみのる）理事長、諏訪中央病院の医療チームと

一緒に、三月二十五日、早朝、諏訪から現地に向かった。

加藤　避難所で第一次支援隊と合流した後、津波の被害が特に激しかった沿岸部を視察しました。鹿島町（かしままち）、それから少し北に位置する新地町（しんちまち）などの沿岸部は、津波によって、壊滅的な状況でした。相馬市などで復旧作業に当たる自衛隊によると、未だに水が引かず、瓦礫撤去のための重機を用いることができないので、作業が難航しているとのことでした。津波被害にくわえ、原発被害に苦しむ南相馬市は本当に厳しい。なによりも、物流が滞っている。食料も燃料もない。そんな中、訪問した鹿島町の避難所では、燃料を節約するために、日中は暖房を切っていました。避難されている方々は寒さのために、日が出て遅い時間になっても毛布にくるまったままでした。寒さは避難所の空気を暗いものにし、被災された方々の体力と共に、気力をも奪っているようでした。

神谷　そのころの避難所の方々の毎回の食事は、冷たいおにぎりと菓子パンくらいのものでした。

被災者１　血圧が高いから、野菜も取りてぇし水分もとりてんだけど、なんもなくて、ゆずの漬けたのがあったから、それなめて、水分補給してたの。

被災者２　昨日の食事は、食パン一枚とジャム。それにペットボトルと、こんなちっちゃいお菓子だけ。

被災者３　食べるもんがあるだけありがたいけど、そんなのが二週間も続いたら、喉も通んなくなるよ。

神谷　こうした声に答えて、鎌田理事長たち第二陣のスタッフは、レトルトのおでんを持ってきてくれました。避難所の方たちに温かい食事をと、看護師さんたちとみんなで、給食室を使ってご飯も炊きました。おでんの残り汁にご飯を入れて、卵おじやも作りました。鎌田先生も、ひとりひとりに声をかけておられました。最後、空っぽになった大鍋を抱えて帰ろうとすると、

拍手。

神谷　避難所の皆さんたちから、拍手が起こりました。冷え切った避難所が、暖かくなったひとときでした。

解説者　しかし、その日、事態は変わってしまった。

解説者　枝野（えだの）官房長官が、福島第一原発から二十キロから三十キロ圏内を、自主避難指示の方向で考えているという談話が流れたのだ。

神谷　「自主避難指示」とは、何とあいまいな表現だろう。自主というからには個人の判断にゆだねるということだ。事故当初から、政府・東電・保安院の発表はあいまいでいい加減だ。

解説者　この日の夜のミーティングは、緊迫したものになった。政府の出す避難指示に従って諏訪に戻るべきなのか。

神谷　第二次支援隊の吉岡先生や福永看護師は残りたいと訴え出ました。

吉岡医師　まだ来たばかりで、ろくに仕事もしていないのに、帰るなんてできません。

福永看護師　私はここに残りたいです。残らせて下さい。

神谷　鎌田先生が、一人ひとり、意見を聞いていかれました。公的な立場と個人的な気持ちの葛藤が、そこにはありました。そして、佐藤先生がおっしゃいました。

佐藤医師　私たちは、南相馬病院の先生達をサポートする立場で活動してきたはずだ。今、病院には、スタッフが戻り始めている。引き継ぐための記録も作ってある。ここはひとまず引き上げよう。

神谷　苦渋の決断でした。

解説者　神谷さんたちが、「九・九九マイクロシーベルトが上限の測定器が振り切れた」と語った飯舘村（いいたてむら）に、非戦を選ぶ演劇人の会の実行委員、篠原が、五月十四日から三日間、ジャーナリストの古居（ふるい）みずえさんたちと共に入った。

篠原　石巻（いしのまき）、女川（おながわ）、気仙沼（けせんぬま）、いくつかの避難所を訪れ、被災の現場も見てきました。車の助手席で地図を見ていると、あるはずのものがなにもない。そこにあるはずの信号も、コンビニも、銀行も、なにもない。山側の木々に漁の網やブイが引っかかり、電車と船が同じ場所に転がっている。その瓦礫の中に大きな魚が何匹も死んでいる。そんな光景と、テレビが決して伝えることのない朽ちた魚の生

臭い匂いが、どこの現場にもありました。
それでも、飯舘村で見た光景には、それらとは全く質の違う痛みがありました。
飯舘は美しい村です。新緑の季節、山の緑が青い空に映えてまぶしいほどでした。
家も壊れていません。瓦礫も魚の匂いもありません。風は爽やかです。でも、その風景の中に、人間が、いない。人が歩いていない。対向車もほとんど来ない。
そしてなによりも、農村であるはずの村の畑に、雑草が生え放題になっている。
田んぼが、ひからび、ひび割れている。牛舎に牛が一頭もいない。働く村人の姿がない。ただ、自然だけが美しい。それが、飯舘村の悲しさでした。

この村では、普通の日常会話が、切ないくらいに異常でした。酪農家の長谷川健一（はせがわけんいち）さんのお宅を訪れたとき、ちょうど、村役場の人たちがモニタリングに来ました。
庭で計った線量は、地表近くで八・六マイクロシーベルト。年間では七十五ミリシーベルトをゆうに超える線量です。その線量に対して、長谷川さんは、

長谷川　ま、あんまり変わんねな。

篠原　役場の方達も、

職員　そうだね。役場のとこで、なかなか放射線量が下がらないから、なんとか下げようってことで、モニタリングポストを土のとこからコンクリの上に出したんだって。そしたらずいぶん下がったみたいだよ。

篠原　いや、それはダメだろう、と突っ込みそうになりました。

職員　なんか、四マイクロまで下がったって。

篠原　それでも私が村役場を訪れたとき、コンクリの上に移されたというモニタリングポストは、地上一メートルで七・一マイクロシーベルトを示しました。

解説者　飯舘村は福島第一原発から四十三キロ離れた、阿武隈（あぶくま）山渓に位置する、人口六千人ほどの小さな村だ。酪農家の長谷川健一さんのお宅は、この村の北のはずれ、前田地区というところにある。

長谷川　長谷川です。私はこの村で、前田地区の行政区長と福島県酪農業協同組合の理事と、萩（はぎ）の里猪飼育センターの代表と…まあ、小さい村ですんで、色々やってました。震災の日は、それはひどい揺れでしたけども、飯舘は山ですので津波の被害などもなく、停電もしましたが、自家発電で何とか牛の搾乳もできました。

村では、最初は、南相馬などから避難してきた人を受け入れてました。ところがそこに、どうも原発が危ない、煙が出てるって話が聞こえてきた。

解説者　三月十二日、十五時三十分、第一原発一号機で水素爆発。これにより、避難指示が半径二十キロ圏内に拡大。

解説者　しかし原発から四十キロ以上離れたこの村のことは、まだ誰も心配していなかった。

解説者　そして、三月十四日、十一時一分。第一原発三号機が水素爆発し、建屋（たてや）が大破。

長谷川　「これは大変なことが起こった」と思い、その日の夜九時頃、村役場の災害対策本部に行きました。そしたら、避難所にしている「いちばん館」のところで、毎時、四十マイクロシーベルトを超えていると。そのときには、それがどのくらいの数字なんだかは分からなかったけれども、今の子どもたちが、お父さんお母さんになるときに、なんであのとき何もしてくれなかったんだって後悔するようなことがあってはならないと思いましたから、とにかく、すぐに子どもと妊婦だけでも避難させるべきだと言ったんです。ところが、役場の担当者に止められました。村長から、この数字を公開しないでくれと口止めされていると言うのです。私は「何を言っているんだ」と言いましたが、役場は動かない。この日は、雪まじりの雨で、北西の風が吹いていました。原発から真っ直ぐ、この村の山に向かって吹く風でした。

解説者　村の公式発表では、この日の最大放射線量は四十四・七マイクロシーベルトだったが、調査に入ったＮＰＯの線量計が、百マイクロシーベルトを振り切ったところもあったという。

長谷川　翌日の十五日は雪でした。この日、私は独断で、前田地区で緊急集会開いて、「外出するな」「マスクしろ」「服を家の中に入れるな」と、みんなに言ったんです。翌、十六日には、家族で相談して、とにかく、二才の孫と子どもたちと年寄りを避難させました。国は「ただちに健康に害を与える数値ではない」と言い続けてましたけど、私は必死にメディアに叫び続けていました。長泥（ながどろ）地区では、雨樋の下で、一ミリシーベルトありました。年間じゃないです、毎時、一ミリシーベルトです。そんななかで、おとなたちは外で仕事してました。洗濯物も外に干してました。子どもたちは外で遊んでました。

篠原　飯舘村で、最も放射線量が高いと言われる長泥地区の峠に立つと、分かることがあります。天気の良い昼間には、峠の向こう、海の方向に、真っ直ぐに原発が見えると聞きました。そこから、風に乗ってきた放射性物質がこの山にぶつかり、飯舘村に広がっていったのではないかと。それでも、そこから見る夕焼けは、綺麗でした。足元にはマーガレットが白く咲いて風に揺れて、新緑の山々は夕日に黒く陰って、ここがなにかに毒されていると信じることの方が不自然だと思えるほどでした。飯舘村でお会いした、昭和元年生まれだという、農家の女性の言葉を思い出しました。

農家の女性　今年は、きゅうりもなすも、スナップえんどうも、よーぐできたの。ほんでも、偉い人たちが、収穫しちゃなんねって言ってんだからだめなんだべけど、ほんでも、目にはなーんにも見えないのよ。色もいくて、つやもいくてねぇ、ホントによーぐできたの。……わたしには分がんね。わたしには分がんね…。

長谷川　四月の初めに、原子力安全保安院の人たちが来て、「安心だ」「安全だ」と言って帰りました。それから、忘れもしません。四月十日、中学校の体育館にみーんな集められて、杉浦紳之（すぎうらのぶゆき）って医学博士の講演を聞きましたけども、「原発に近い南の端の地区以外は村は安全だ。安心していい」と言ったんです。それが、その翌日の、四月十一日、計画避難の発表ですよ。危ないから一ヶ月以内にこの村を出ろって、どういうことですか。安全だ、安心だって言われたから、結局子どもたちは二ヶ月近くも放射能を浴び続けることになったんですよ。

解説者　そして、牛乳の出荷も制限された。

長谷川　牛は、毎日、乳を搾ってやらないと乳房炎（にゅうぼうえん）になってしまうんです。だから毎日乳を搾り続けました。けれども、売ることは出来ません。三月十二日から六月六日までの約三ヶ月間、毎日毎日、絞っては捨て、絞っては捨てる、ということを繰り返しました。

解説者　実はこの捨てた牛の乳の放射線量は、国の定めた基準値以下だった。国の暫定基準値、二百ベクレルに対して、一回目が五から七ベクレル。二回目と三回目に至っては、全く検出されなかった。

解説者　長谷川さんたちは、密閉保存された昨年の牧草を、牛たちに食べさせていたのだ。

長谷川　それでも出荷はできません。飯舘村の牛乳だというだけで売れない。四月

三十日の時点で、国からも県からも何のフォローもありませんでした。出荷はダメ。牛の移動もダメ。ただ、と殺だけはしてもいいと。もうどうすることもできません。その頃、畑の土が二万二千ベクレルだと言われました。それだけ汚染された土から基準値以下の牧草が作れるはずがない。私たち飯舘の酪農家は、自分たちで、廃業を決意しました。自分たちで決めて、親牛たちを、自分たちの手で、と畜場に送りました。私はそれでもみんなに、なんとか国や県に掛け合って、お腹に子どものいる牛や若い牛で汚染されてない牛を移動させてもらえるように掛け合うから頑張れと言いました。それでなんとか三分の二の牛は助けることができました。それでも、三分の一の、思いのある牛を、自分たちで処分しなければならなかったのです。

篠原　この村で、福島出身で東京にお住まいだという方にもお会いしました。その方は、こんなことをおっしゃっていました。

福島出身、東京在住の女性　東京で、原発反対の人たちの言葉を聞いていると、どうしようもない距離を感じてしまうときがあるのです。車の事故に例えて言うなら、今、事故が起こって、目の前に血を流して苦しんでいる人がいる。なのに、やっぱりこの道は安全じゃなかった、もっと道路を広くするべきだった、いや、車そのものをなくすべきだ、東京の人たちがそんな話をしている。でも、今、福島は、血を流して倒れているの。車をなくすかどうかよりも先に、今、倒れている人を助けて。私の故郷、福島を助けて。…東京にいると、ときどき、そう叫び出したくなるときがあるの。だから、長崎大学の山下先生のお話を伺ったときには、本当に嬉しかった。

山下　私は原爆を浴びた両親から生まれましたから、被ばく二世です。しかし、こうやって元気に仕事をしております。

解説者　山下俊一（やましたしゅんいち）。長崎大学教授にして、福島県放射線リスク管理アドバイザー。

解説者　そして、福島県立医科大学の副学長に就任。

解説者　二〇一一年三月二一日、福島市で行われた講演会での発言。

山下　放射線の影響は、実はニコニコ笑ってる人には来ません。クヨクヨしてる人に来ます。これは明確な動物実験でわかっています。私がデータです。
私が、唯一お願いしたいのは、皆さんと我々、あるいは皆さんと県、あるいは国の信頼関係の絆をつくるということです。我々が信じなくてはいけないのは、国の方針であり、国から出る情報です。

解説者　山下教授のこの発言は福島市の広報に掲載され、回覧板で回った。

解説者　福島市の主婦。

主婦　これを読んで、それまで心配して外出を控えていた妊婦さんや子どもたちが、安心して外に出るようになっていったのです。

山下　年間一〇〇ミリシーベルト以下の被曝は安全という基準は日本の国が決めたことですよ。我々は日本国民です。国の指針に従うのは国民の義務でしょう。

解説者　慶應大学で放射線科の講師をしている、近藤誠（こんどうまこと）。

近藤　確かに一〇〇ミリシーベルト以下の被曝では火傷のような急性症状は出ません。しかし、五〇ミリシーベルト以下の被曝でも発がん率は上昇しています。百ミリシーベルトの被曝なら、日本のガンの死亡率が約３パーセント、上がる計算になります。

長谷川　正直、迷っています。私が故郷を見守ろうとする限り、家族はバラバラです。孫の顔も見られない。それよりは、故郷を捨てて、家族一緒にどこかで暮らした方が良いのかと。

福島出身、東京在住の女性　揺れるんです。安全だと言われるとホッとして、さあ、故郷の復興のために頑張ろうと思うんです。でも、危険だという話を聞くと、避難してと言った方がいいのだろうかと。心が引き裂かれて、揺れてしまうんです。振り子のように、大きく…。

原発と地域振興

高木市長　えー、今日は皆さん方、原子力といわゆる関係地域の問題等についての勉強会をおやりになろうということで、非常に意義あることではなかろうかと存じております。

解説者　一九八三年一月二六日、石川県羽咋郡（はくいぐん）志賀町（しかまち）。

解説者　商工会主催の『原発講演会』に招かれた、

解説者　福井県敦賀（つるが）市長、高木孝一（たかぎこういち）。

高木市長　原子力発電所というものを正しく理解していただくために、原発を持つ町の首長として、快く馳せ参じさせて頂いた次第でございます。さて、一昨年の四月でございましたが、

解説者　この講演会の二年前である一九八一年四月、敦賀原発近海の海藻から異常に高い放射能が検出された。

解説者　原子力安全委員会の調査の結果、敦賀発電所一号機の排水溝から放射性物質が漏洩したことが分かった。

解説者　漏れた放射性物質は平常時の十倍。

解説者　当初原因は、放射性廃棄物処理を行っていた建屋の設計上の問題に、運転上のミスが重なったからとされた。

解説者　しかし、さらに調べると、その一ヶ月前に大量の放射能を含んだ水がタンクからあふれる「事故」が起きていたことが判明した。

解説者　敦賀発電所はその事実を隠していたのだ。

高木市長　そんなことで新聞報道、マスコミは騒ぐけれど、私はなぜ騒ぐのかさっぱり分からない。その海藻を一年食ったって人体に影響はない量だって言うんですから。しかし、昆布が売れない。敦賀は日本全国の食用の昆布の八割を作っておるんです。が、その昆布が全く売れなくなってしまった。まあ困ったことだということで、私は魚屋さんでも、民宿でも一〇〇円損したと思う者は精神的慰謝料五〇円を含んで一五〇円貰いなさいと言ったんです。ところが原電の方は、少々多くても、もう面倒臭いから出して解決しますわと言いましてね、百円損した者に五百円払うって言うんですな。いまだに一昨年の事故で大きな損をしたとか、事故が起きて困ったとかいう人は全く一人もおりません。まあ言うなれば、率直に言うなれば、一年一回ぐらいは、あんなことがあればいいがなあ、そういうふうなのが敦賀の町の現状なんです。笑い話のようですが、もうそんなんでホクホクなんですよ。何せ原発ができると電源三法交付金が貰えます。

解説者　電源三法交付金は、電源開発が行われる地方自治体に交付されるお金である。

解説者　主な目的は原発の建設促進と、円滑な運転。

解説者　原発の出力、実際の発電量、使用済み核燃料の貯蔵量などによって算定され、原発が立地し続ける限り何らかの名目で出る。

高木市長　で、三法以外のお金、まあ裏金ですね、裏金！　三法のカネは三法のカネとして貰うけれども、その他にやはり地域の振興に対しての裏金をよこせ、協力金をよこせ、というのが、それぞれの地域である訳でございます。例えば敦賀市の場合、敦賀２号機のカネが七年間で四二億入ってくる。三法のカネが七年間でそれだけ入ってくる。ただ「もんじゅ」がございますとねえ、万が一の危険がねえ……というわけで、入ってくるカネが六十数億円になろうかと思っておるわけでございます。

まあそんな訳で短大は建つわ、高校は出来るわ、五〇億円で運動公園は出来るわね。そりゃあもうタナボタ式の街づくりが出来るんじゃなかろうか。そういうことで私は皆さんにぜひ原発をお薦めしたい。私は信念を持っとる！　……えー、その代わりに百年経って片輪が生まれてくるや、生まれた子供が全部片輪になるやら、それはわかりませんよ。わかりませんけど、今の段階では原発をおやりになった方がよいのではなかろうか。こういうふうに思っております。

解説者　原子力を受入れた自治体の財政は時間と共に悪化するように出来ている。

解説者　原発は建設時から導入時が一番カネがまわり、その後は固定資産税の償却など時間が経つほどにカネが回らなくなる。自治体自身が過剰なハコモノを作りその維持コストがかさんでくることも、財政悪化の要因である。

解説者　それでも、一九六三年に日本で初めての原子炉が茨城県東海村に設置されて以来、一度原子力を受入れた地域から原子力発電所や関連施設が完全に撤去された事例はない。

解説者　それどころか自治体がその後の経済を安定させようとした時、その代替手段がない中で「ポスト原発は原発だ」という答えに行き着いてしまうのが現状である。

解説者　それは「一度はまると抜け出せない麻薬のようなもの」なのだ。

解説者　「フクシマ」論をまとめた社会学者、開沼博（かいぬまひろし）。

開沼博　かつてムラは貧困の中で生活苦から自由になることを望んでいました。しかし戦後の経済成長の中で生存に必要な最低限のモノが充足してくると、道路、文化施設、スポーツ施設など「モノへの欲望」が生まれてきます。そうすると都市と比べて近代化が遅れているという自覚が植え付けられる。そんな欲望のもとに原子力はやってきて、原発が来ればここも都会になる、もっと豊かになれるという「夢」を持たせたのです。

安全神話

東電社員１　東京電力から参りました。皆さんの生活のなかの電力の三分の一を占めているこの原子力発電というものは、石炭の七万分の一の燃料で同じだけのパワーを出すんですね。

東電社員２　私が指で挟んでいる物は何だと思いますか？　これは「ペレット」と言って、中には燃料になるウランが詰まっています。この直径一センチのペレット一個で、おうちで使う電気を八ヶ月から九ヶ月分作ることが出来るんですよ。

東電社員３　しかもＣＯ２が少なくてすみます。リサイクルもいずれできるようになる予定です。原子力発電というのは、資源の少ない日本において、ワクワクするような「夢のエネルギー」なのです！

大きな爆発音が聞こえる。

解説者　一九八六年四月二十六日午前一時二十四分、旧ソ連のウクライナ共和国、チェルノブイリ発電所の第四号炉が爆発した。

解説者　この事故による放射能汚染被害は、広島型原爆の五〇〇倍から六〇〇倍とも言われている。

解説者　放射能は北半球全体にばらまかれ、ベラルーシ、ウクライナ、ロシアの三国だけでも九〇万人以上が被災し、四〇万人が移住させられた。

解説者　チェルノブイリから約八〇〇〇キロ離れた日本でも、野菜・水・母乳などから放射能が検出された。

解説者　原子力産業会議、顧問。

原子力産業会議顧問　チェルノブイリは確かに大事故でした。被害に遭われた方々に哀悼の意を表します。……しかし、人間の活動には常にリスクが伴います。原爆の怖さを知った上で原子力は使われています。被爆者の平和利用にだけその力を使ってほしいという悲痛な叫びに支えられ、今日まで続いてきました。その過程は風化させてはなりません。

解説者　京都大学原子炉実験所、小出裕章（こいでひろあき）。

小出　私たちがどんなに事故が起きてほしくないと願ったところで、破局的事故の可能性は常に残ります。そこで、原子力を推進する人たちはどういう対策をとったかというと、破局的事故はめったに起きない、そんなことを想定することはおかしいと。だから想定不適当という烙印を押して、無視してしまうということにしたわけです。

解説者　原子力推進派は、更に危険な計画を押し進めようとしている。

解説者　ウランを核分裂させて人工的にプルトニウムという物質を作り出す。そのプルトニウムを再処理して、高速増殖炉もんじゅで利用するという構想。

小出　しかし、そのもんじゅの計画はとん挫している。先が見えなくなったため、余ったプルトニウムの使い道としてＭＯＸ燃料、これはウランとプルトニウムを混ぜたものですが、これを原子炉で使用することが考えられました。これがプルサーマル計画です。

盛大な拍手と共に電気事業連合会役員登場。

電気事業連合会役員　電気事業連合会からのご報告です。電力会社各社は、二〇一〇年度までに全国で一六基から一八基の原子力発電所でプルサーマルの導入を目指し、各社とも経営の最重要課題として取り組んでいます。

音楽に合わせて、プルト君が現れる。

プルト君　こんにちは、みなさん。僕はプルトニウムのプルト君です、どうぞよろしく。

解説者　『プルトニウム物語　頼れる仲間プルト君』。

解説者　日本原子力研究開発機構が広報用に制作したアニメーション。

プルト君　僕は長崎型原爆に使われてしまいましたが、本当は平和に働くことが大好きなんです。例えば僕は青酸カリのように、飲んだらすぐ死ぬというような劇薬ではありません。皮膚に触れた場合でも、そこから吸収されることはありません。飲み込まれて、胃や腸に入った場合も、ほとんどが排泄されて、プルトニウムは身体の外に出てしまいます。

小出　違う！　プルトニウムは飲み込まれた場合には、たしかにほとんどが排せつされるけれど、呼吸で取り込まれた場合には排せつされにくく、肺に達すると、二八マイクログラムという極めてわずかな量で一〇〇パーセント肺癌を発生させるといわれている猛毒だ。

青白い閃光が走る。

解説者　一九九九年九月三十日午前十時半頃、茨城県那珂郡（なかぐん）東海村の核燃料加工工場ＪＣＯで事故が発生、三人の作業員が被曝し、内二名が死亡した。

解説者　「臨界事故」である。

解説者　被ばくした作業員、大内久（おおうちひさし）さんを診た医師は当時を振り返る。

医師　放射線の量、減り続けるリンパ球などのデータはかなり深刻なものでしたが、楽しそうに家族の話をしていました。どこから見ても重症患者には見えませんでしたね。しかし……、染色体がばらばらに破壊されたということは、今後新しい細胞が作られないことを意味しています。放射線被ばくの場合、たったゼロコンマ何秒かの瞬間に、すべての臓器が運命づけられる。ふつうの病気のように血液とか肺とかそれぞれの検査値だけが異常になるのではなく、全身すべての臓器の検査値が刻々と悪化の一途をたどり、ダメージを受けていくんです。

看護婦１　看護記録ノートより。最初は医療用のテープを貼った痕が消えなくなりました。そのうちテープを貼ったところの皮膚が引っ付いて、テープを剥がすと全部とれてしまうということが起こって……、最終的にはテープが一箇所も使えなくなりました。

医師　入院したときの右手は、一日で一気に日焼けしたぐらいの赤さで、少しはれているだけだったんですね。被曝して二週間たった頃から表面が徐々に水ぶくれになっていきました。事故の時、最も多くの放射線を浴びたんでしょうね。

看護婦２　目も乾燥しやすいし、出血しやすくなって、目から出血して、なんかこう、血の涙が流れているような感じでしたね。

看護婦１　身体のほとんどをガーゼで覆わなければならなくなってしまって……。皮膚が失われたところから、血液や身体の水分がしみだしていました。ほんとに、毎日毎日しみだしがすごくて、ガーゼの交換をするんですけど、半日かかるんですね。見ているだけですごく痛々しかった。

看護婦２　本当に、なんというか、ここにいる人は何なんだろう。誰なんだろうではなく、何なんだろう。ぼろぼろになって、機械につながれた体がある。自分たち看護婦は、その体を相手に、次から次に、その体を維持するために、乾きそうな角膜を維持するために、はげてきそうな皮膚を覆うために、そういう処置ばかりどんどん続けなければならなかったんです。自分は一体何のためにやっているんだろう。自分は別に角膜を守りたいわけではない。大内さんを守るためにやってるんだ。そう思わないと耐えられないケアばかりでした。大内さんを思い出しながらでないと、自分のやっていることの意味が見出せないような、そんな毎日でした。

解説者　原子力安全委員会の報告書。

原子力安全委員会１　今回の臨界事故は、わが国の原子力平和利用史上、前例のない大事故でした。

原子力安全委員会２　事故の直接的原因としては、作業員が作業手順を逸脱し、「使用目的が異なり、また安全設計されていない容器に、制限値以上のウラン溶液を注入したこと」にあります。

原子力安全委員会３　今回の事故を契機に、安全確保における自己責任を再認識・徹底するとともに、守るべき「当たり前のこと」いわば基本ルールを遵守させることが必要です。

解説者　市民科学者、高木仁三郎（たかぎじんざぶろう）。

高木　原子力安全委員会は、原子力利用そのものの方向転換は全然行わずに、この報告書によって新しい原子力神話を構築しようとしているのではないかと、私には思えてなりません。事実、事故後電力会社は、

電力会社　これは原発の事故ではないから、原発の安全性の問題とは無関係です。原子力発電所は徹底した安全管理により、運用されております。

広瀬隆　それほど安全ならなぜ大都会「東京」に原子力発電所を建てないのか。

解説者　広瀬隆（ひろせたかし）は著作「東京に原発を！」で現状を嘆いている。

広瀬　今こそ東京人を目醒めさせるために、都庁の新庁舎を押しのけても、新宿のど真ん中に原子炉をドカンと据え付け轟然（ごうぜん）とタービンを回転させなければならない。図面を引き、土建業者の猛烈なエネルギーで、立派な奴を建ててやろうではないか。

石原慎太郎　都知事です。結構じゃないか。日本の原発の管理体制は世界一ですからな。東京に原発を造ることで、世界に日本の技術をアピール出来るのであれば、造ったっていいと思うね、立派な原発を。

広瀬　そういうつもりで言ったんじゃない！　原発みたいな時限爆弾を持ちたいなら、東京都民も自分の身を危険にさらせということだ！

石原慎太郎　何だ反対派か。原発に反対するなんて全く訳分からないね。どういう理屈なんだ？　日本は完璧な管理技術を持っているというのに。

中村　科学ジャーナリストの中村政雄（なかむらまさお）です。原子力発電所ほど耐震性に配慮した建築物はありません。また世界中、地震で壊れた原子力発電所はない。専門家たちが耐震性を検討し、安全と認めたのです。それを浅い知識で「危険だ」と切り捨てる。俗受けする言い方で感性に訴えると、人々は感情に流されやすい。ドイツのナチズムもそのようにして広まったんです。

碧海　碧海酉癸（あおみゆき）です。

木元　木元教子（きもと　のりこ）です。

東嶋　東嶋和子（とうじま　わこ）です。

三人　私たち、原子力利用の正しい知識と、理解の普及につとめる、放射線三姉妹です！

碧海　私、碧海酉癸は、ＴＢＳで教養番組を作ってきました。例えば、日常生活のなかにだって危険はいっぱいありますよね。食中毒とか交通事故とか、いろんな恐怖があるじゃない。原子力とか放射線だけが特別に怖いとは、私にはあまり思えないんですよ。

木元　木元教子は、原子力安全委員会の委員をやっておりました。原子力が怖いという方は、即、放射線恐怖症といってもいいくらい、なぜ怖がるのか。放射線のリスクはコントロールできるんですよ。

東嶋　私、東嶋和子は、読売記者を経て科学ジャーナリストをしています。私自身、さまざまなリスクを勉強した結果、放射線や原子力事故のリスクは非常に小さいとわかりました。それに比べて、エネルギー危機や戦争のリスクのほうが大きいから、私は原子力を選びます。そこが根本なんですね。

解説者　これは二〇〇八年に出版され、

解説者　今年四月に増刷が決定した書籍での発言である。

解説者　核エネルギーの安全神話は、いったいいつ生まれたのか。

解説者　一九四五年八月六日、広島への原爆投下。その一ヶ月後、アメリカは調査団を派遣した。

調査団　報告します。広島、長崎ともに放射能の痕跡は発見できず。一部検出も、爆発時にさかのぼっても、日本人に問題を起こすレベルではありません。

解説者　ソ連との核兵器開発競争に遅れを取るわけにいかなかったアメリカには、「絶対安全な放射能」という宣伝が必要だった。

解説者　原爆投下の八年後、アイゼンハワーアメリカ大統領は、「平和のための原子

力」という演説を国連総会で行った。友好国で、原子力の産業的利用をアメリカ主導で広めようとしたものだった。

解説者　原爆、さらにビキニ環礁での水爆実験で第五福竜丸が被爆し、日本では反核、反米感情が高まっていた。日本における「原子力の平和利用」キャンペーンは、日本人に核兵器を受け入れさせるための重大な心理作戦だった。

解説者　そのプロパガンダを担ったのは、讀賣新聞を買収し、日本テレビを立ち上げたメディア王、正力松太郎。

解説者　政界に進出し、いずれは首相になりたいという野望を持った正力は、アメリカの言う「原子力の平和利用」を日本で実現する事を、政界での実績にしたいと考えた。

解説者　そして政界でのもう一人の立役者が、後の首相、中曽根康弘だった。

解説者　一九五三年、アメリカで最先端の原子力技術に触れた中曽根は、「日本もボヤボヤしてはいられない」と痛感した。憲法改正や再軍備を唱える中曽根にとって、「原子力」は「長期的な国策のために」欠かせないものとなった。

解説者　第五福竜丸の被曝の年、中曽根によって提出された原子力予算は衆院を通過。翌年、正力は原子力委員長と科技庁長官のポストを手にし、原子力行政を独占した。

解説者　そして一九五七年、茨城県東海村で日本初の実験用原子炉が稼働すると、メディアはこぞって原子力礼賛の報道を繰り返すようになった。

解説者　六〇年代、各メディアの原発推進論は強まる一方だったが、公害問題などに注目が集まる七〇年代に入り、原発に対する市民の批判的な声が高まりはじめた。

解説者　だが、商業用原子炉の運転が始まると、財界は気づいてしまったのだ。原発は金になる、と。

解説者　電力業界は自民党政権を支援し、官僚機構も政府や業界と癒着し、巨大な「政官財」の原発トライアングルを形成した。

解説者　そして、政府や電力業界は、メディアに対する広告スポンサーとしてあまりに巨大だった。

解説者　その為、スリーマイル島やチェルノブイリの事故が相次いでも、日本の技術力は高い、日本の原発は安全だ、日本の原発はスリーマイルにもチェルノブイリにもならない、とメディアは報じ続けた。

解説者　これが、自民党政権、電力業界、官僚機構、大手原発メーカー、大手ゼネコン、大手銀行、大手生命保険会社、大手メディアが一体となって作りあげた、日本の原発は安全だ、という神話の実像である。

解説者　そして、民主党政権も、今ある原発の維持と、海外への原発輸出という基本姿勢は崩していない。

解説者　作家、池澤夏樹（いけざわなつき）。

池澤　核エネルギーはどこか原理的なところで人間の手に負えないのだ。それを無理に使おうとするから嘘で固めなければならなくなる。まずは自分たちを欺いて安全と信じ込もうとする。そこに科学的根拠はない。

解説者　福島県生まれの哲学者、高橋哲哉（たかはしてつや）。

高橋　少なくともいえることは、原発が犠牲のシステムであるということである。或る者たちの利益が、他のものたちの生活を犠牲にして生み出され、維持される。犠牲にする者の利益は、犠牲にされるものの犠牲なしには生み出されないし、維持されない。

原発労働者

坂本　福島第一原発の原子炉が煙を吐き、ガンマ線が漏れていた頃、瓦礫を撤去し、泥を運び出すために雇われました。

解説者　中部地方の建設会社、北陸工機の坂本正之（さかもとまさゆき）さん。

坂本　国の危機を救わなければって使命感はありますよ。それと、自分は頭がよくないから怖くないんですよ。中学出たらすぐ働きに出てました。本当に賢い人た

ちは、シーベルトとかベクレルというのに対して知識があるから、非常に怖いというか不信感、不安感がある。無学、無知というのは考えてみたら非常にありがたいですよ。

解説者　現在一日三〇〇〇人前後働いている作業員の多くは、立ち向かう危険についてあまり知識も経験もなく、トレーニングも受けられていない下請け業者や労働者だ。

坂本　防護服について三〇分説明を受けたけど、それ以外はなんにも。それまで線量計を使ったこともないんです。

解説者　現場では、放射能を測定する線量計が一八〇個不足していた。

解説者　東電協力会社社員、現在も福島第一原発で電源の復旧作業に従事。

作業員Ａ　事故直後から働いています。免震重要棟という建物内の会議室にみんなで雑魚寝してました。支給されるのは毛布一枚だけ。しかも簡易防護服を着たまま眠るんです。五〇〇人以上の作業員が出入りしているんで、まさに寿司詰め状態。部屋に入れずに、廊下で寝ている人もいました。ここでは、裸になると高濃度の放射線を浴びる恐れがあるので、風呂もシャワーも使えず汗も流せませんでした。

解説者　この免震重要棟は放射性物質が入り込まないようにした施設で、今回の事故直後に作業員が唯一、マスクなどを取って事務作業や休憩ができる場所だった。

解説者　ところが免震重要棟の扉が三月の水素爆発で歪み、放射性物質が入り込んでいたことが後に発覚。

解説者　マスクの装着指示が徹底されていなかったため、作業員が内部被ばくしてしまった。

作業員Ａ　ここに来る前に元請けの事務所に行ったんですが、驚きました。机の上に一枚の誓約書が置いてあり、そこには『最大二五〇ミリシーベルト以上の放射線を浴びても、私は自分の意思で働く』

解説者　二五〇ミリシーベルトは、三月一五日厚労省が定めた緊急時の作業員の被ばく限度量である。

作業員Ａ　長年働いていますが、こんな書面を書かされたのは初めてですよ。強制

じゃないからって社長は妙に真面目な顔で言っていましたが、今さら『そんなに危ないならやめます』とも言えません。恐る恐るサインをしました。通常なら、親会社が管理している「原発手帳」を持たないと原発内部に入れないのですが、社長が今回は必要ないって。

解説者　原発手帳とは「放射線管理手帳」の通称で、作業員の身分証明書のようなものだ。

解説者　原発への出入りや毎回浴びた放射線量などが打ち込まれ、規定の被曝量を超えてしまった作業員は、原発で仕事をしてはいけない規定になっている。

作業員Ａ　いつもなら、決してなくしたり、外部に持ち出したりすることのないようにと厳しく言われてるんです。凄い放射線量が測定されると今後は誰も働けなくなってしまうから、持たせないようになったんじゃないかって、噂しています。

解説者　東京電力によると、福島第一原発の雇用数は昨年七月現在で六七七八人。うち、東電社員は一〇八七人だけで、五六九一人は四〇七社の「協力企業」の作業員だ。

解説者　その九割以上を地元福島県から採用している。

解説者　二〇一一年の六月に調査した弁護士によると、

弁護士　地元業者の証言によれば、東電が元請け業者に支払う日当は作業員一人当たりにつき一〇万円前後。それが何層もの下請け会社の介在で手数料を引かれ、作業員が受け取るときには八〇〇〇円になった例もあります。多くの労働者が中間搾取され、安い日給で働いているのです。

解説者　実際に、原発に労働者を送り込んでいるのは、東電ではなく一次から八次の下請けの会社。

二次下請けの正社員　二次下請けの正社員です。労働基準監督署が現場作業をしているところに入る場合は、抜き打ち検査を行うのが当たり前なんです。なぜ抜き打ちするかというと、会社が都合の悪いものを隠してしまうから。でも、原発の中って危険でしょう？　予告監督せざるを得ないんです。まあ、ぶっちゃけ、行政は摘発できないでしょうね。

解説者　「西成労働福祉センター」を訪れた日雇い労働者。

現場作業員Ｂ　宮城でダンプの運転手やってくれへんかって話やったのに、何か知らんけどえらい分厚い防護服着せられて、重たい瓦礫動かす仕事やってんねん。どういうことや。話違うわ。

解説者　センターは求人を出した業者側の調査に乗り出し、大阪労働局も事実関係の確認を始めた。

現場作業員Ｂ　「宮城県、一〇トンダンプ運転手、日当一万二千円、三〇日間」って、聞いててんで。せやのに、福島の第一原発に行かされて。なんでや！

解説者　三月二四日。

解説者　放射線管理者がいないまま二〇〇〇ミリから六〇〇〇ミリシーベルトの汚染水にくるぶしまで浸かり、作業員二名が被ばく。

解説者　また、マスクをしないで作業員の着替えを手伝った女性職員が一七・五五ミリシーベルトの被ばく。これは女性の制限値の三倍以上。

解説者　五月十四日。

解説者　作業中に倒れた六〇歳の男性が死亡。死因もあいまいなまま、労働基準監督署が現場に入ることもなく処理。

解説者　六月三日。

解説者　三ヶ月の累積が六七八ミリシーベルトの被ばくをした労働者の存在を東電が公表。

解説者　うち五九〇ミリシーベルト分は内部被ばく。通常時の作業員の、年間被ばく限度量五〇ミリシーベルトの一二倍を浴びたということだ。

厚労省役人　厚労省より発表致します。えー、七月二六日現在、被ばくした作業員で、二五〇ミリシーベルトを超えた人は六人、一〇〇ミリから二五〇ミリシーベルトの人は一〇人、ですね。

解説者　その後、市民団体の追求により厚労省の内部文書の存在が明らかにされた。原子力安全・保安院と東電は三月下旬の時点で今後の作業員の被ばくを予測。事故収束までに、五〇ミリシーベルト未満が約一六八〇人、一〇〇ミリシーベルト以上が約四八〇人になるだろうと発表した。

解説者　年間二〇ミリシーベルトを継続して被ばくすると、千人に一人の発がん死が増える。一〇〇ミリシーベルトは単純計算で二百人に一人、がん死のリスクが増える、ということになる。

樋口健二　労働者の被ばく線量が年間一〇〇ミリシーベルトから一挙に二五〇ミリシーベルトに引き上げられましたが、これはとんでもない数値です。

解説者　写真家、樋口健二（ひぐちけんじ）は三八年間原発労働の現場を追い続けてきた。

樋口健二　事故があったから原発労働者はひどい目にあっているわけではない。三・一一の前も、後も、ひどいんです。原発が稼働すると放射能が出る、それは宿命的なんです。人を被ばくさせて原発は動いているんです。原発がクリーンだ、コンピューターで動かせる、なんて真っ赤な嘘だ。

解説者　一九九五年にイギリスで放映されたドキュメンタリー番組「隠された被曝労働・日本の原発労働者」は、樋口氏がそれまでに日本国内で取材した原発被ばく労働者たちを、改めてビデオカメラに収めた作品だ。

樋口健二　岩佐嘉寿幸（いわさかずゆき）さんは私が初めてあった被曝による患者で、その時、原子力業界を相手に裁判をおこすところだった。彼は一九七一年五月二十七日に、敦賀原発で配管に穴をあける作業に従事し、漏れた水を膝に浴びた。

岩佐嘉寿幸　最初足にね、足が火傷したか虫さされかを、思わせるようなね、かぶれができて、水ぶくれができたようなね、症状が足には出て、全身はだるい。放射線皮膚炎、リン性リンパ腺浮腫（ふしゅ）という診断が出たわけですよ。

樋口健二　岩佐さんは七十五年三月、労災の認定を求め、九三年に敗訴。労災申請は却下された。最大の原因は、被ばくを記録した証拠がなかったためだ。彼が勝っていたら原発業界全体の計画が崩れ去っていただろう。

解説者　年一回、原発は点検のため止められ、大量の労働者が「放射能の海」へ入る。

解説者　一人当たりの被曝量が制限されているので、人海戦術が取られる。

解説者　それほど放射能が強いのだ。

岩佐　原発労働者はね、品物か、工具のように扱われ、使い捨て、切り捨て、なりふり構わない扱いを受ける代表だと思います。

樋口　岩佐さんは一七年間身体の不調を抱えながら闘い続け、認められませんでした。日本の司法は、被ばく労働者を徹底的に潰してきたんです。

岩佐　日本の国はね、豊かな国だ、先進国だ、民主主義だと言ってるけどね。全くね、絵に描いた餅だと思いますよ。

解説者　一九七〇年代に美浜（みはま）、福島第一、敦賀（つるが）の三つの原発で働いたライター、堀江邦夫（ほりえくにお）は自著「原発ジプシー」で、作業員が親会社などに「ピンハネ」されている実態や、被ばくのずさんな管理の状況を明かした。

解説者　堀江邦夫、当時三一歳。一九七八年九月、関西電力美浜発電所に採用が決まる。

堀江　今日はパイプの放射能「除染」作業。ステンレス製のパイプの「除染」をし、次に放射線管理責任者の検査を受ける。パスしたものを三階に運び上げ、検査に引っかかったものは再除染。水に濡らしたタオルで表面に付着した放射性物質をふき取る。もちろん目には見えないのだが……。

労働者１　あっと、堀江さん！　タオルはどんどん新しいのと取り替えてよ。それじゃないと、放射能があっちこっちに広がってしまうよ。

堀江　放射能物質を取り除かなくてはならないのに、逆に汚れたタオルを使用していたために汚染を拡大してしまった。

労働者１　ちょっと拭いたらこの赤いビニール袋に捨てちゃって、新しいやつをどんどん使ってよ。

堀江　たいして身体を動かしていないのに、呼吸が荒くなる。生まれて初めて防護服を着ている。管理区域用の作業着である白のツナギ、淡いクリーム色の靴下。その上に黄色のツナギ、赤い靴下。綿手袋の上に薄手のゴム手袋をして袖口をガムテープで固定。さらに、円形のフィルターが二つついた、鼻と口の部分だけを覆う「半面マスク」をつける。四〇度以上になる炉心近くで耐えられずマスクを

外してしまう人が結構いるらしいけど、その気持ちわかる。「管理区域内では、必ず放射線管理責任者の指示に従ってください」と言われていたが、「指示に従う」べき放射線管理責任者の姿もない。

労働者２　管理区域から外へ出るときは、体が放射能で汚染されていないかどうかを調べるハンド・フット・モニターって機械があるんです。身体のどこかが汚染しとれば、ランプが付き、シャワーを浴びたりしなければならんのですが、つい最近、なんと一五、六回もランプがついたって男がいましたよ。いつまでたっても外へ出られんっちゅうて、その男、最後には泣きっ面になっちゃって……アッハハ……。四回ランプがついたって人は多いですよ。けど、一五回ですからねえ。

解説者　放射線管理区域とは、ある一定の基準を超えて外部被ばくをするおそれのある区域のことをいう。

解説者　原発では、原子炉建屋内など内部被ばくの可能性もある区域を汚染管理区域として、より厳重な装備で入る。

労働者１　アラームメータ？　びーびー鳴ってたら仕事にならんから、おじちゃんに預けとくんですよ。受け取り専用のおじちゃんがいるんですよ。ぽーんと投げると受け取るんです。そんなアラーム計持ってったら、一分も持たへんわ。

堀江　今日、ホールボディカウンター受けに行ったとき、黒人さんを見たんだけど……。

樋口健二　黒人労働者が働いていたのは、福島原発だけではありません。一九九七年、敦賀原発へ取材に行ったとき、たまたまそこで働く黒人たちに出会って彼らの写真を撮影しました。彼らの多くは米国のジェネラル・エレクトリック社の下請けを通じて、観光ビザで二、三週間働いていたのです。

労働者２　彼らの給料？　べらぼうに高いことは覚えてる。なんでも、どれだけの線量浴びたらいくらという計算らしかった。それから、やつらは、三日、四日働くと、すぐいなくなっちゃうのよ。すぐ新しいのが交替で来たけど……。会社の人間の話だと、やつらはスラム街でウロウロしてんのとか、刑務所に入ってた連中だって言ってたなあ。

樋口　一九七〇年から二〇〇九年の間、五〇万人もの被ばく労働者が生み出されていることを、日本人は認識しなければならない。原発に入るということは、被ばくなんだ。これは長崎、広島に匹敵する、平和のなかの戦争だ、と僕は言っているんです。

解説者　堀江は原発を去って半年後、自分の内部被ばく量を知るため、放射線従事者中央センターを訪ねた。

解説者　同センターでは各労働者の被ばく歴をコンピューター管理している。

堀江　照会にはたやすく応じてくれるだろう。そんな気軽な気持ちで出向いたのですが、「教えられない」とにべもなく断られてしまいました。その理由がふるっています。

センターの人　プライバシーにひっかかるから……。

堀江　誰のプライバシーですか。本人目の前にして、プライバシーも何もあったものではありません。そんな理由で引き下がるわけにもいきませんので、専務理事だかに面会を求めました。

専務理事　お答えできないんです。このセンターは電力会社やメーカーなどの事業者との契約に基づいて運営されています。ですから、いくらご当人でも被ばく量は教えられない。もしどうしても知りたいのであれば、そうした事業者のほうに話を通してください。

堀江　つまり、労働者たちは自らが浴びた放射線量すらも教えられずにいる、言い換えるとそれら被ばくデータはすべて原発推進者たちの手にしっかと握られてしまっている、ということなのです。そしてさらに、もうひとつの現実を知っておく必要があります。原発の仕事を去った労働者に対しては、医学面での追跡調査すら一切なされていない。まさに「使い捨て」です。

解説者　厚労省による発表。東京電力が福島第一原発で三月中に作業員を対象に行った被ばく量調査では、協力会社の下で働いていた一九八人の身元が特定できず、被ばく量を検査できていない、いまだに連絡が取れないなど、ずさんな労務管理の実態が浮かび上がった。

解説者　二十年前、息子の被ばくによる労災認定のために闘った嶋橋美智子（しまはしみちこ）さん。

嶋橋美智子　何年もの間、私には何も見えておらず、自分の息子がどこで働いているのか知りませんでした。今、あの子の死は殺人であると分かっています。

解説者　一九九一年十一月二十日午前四時五十五分、嶋橋伸之（しまはしのぶゆき）さんの白血病との闘いは終わった。発症から二年一カ月。浜岡（はまおか）原発で約九年働き、二十九歳一カ月の人生だった。

解説者　その間の被ばく線量は、五〇・六三ミリシーベルト。

解説者　年間では最多の年でも九・八ミリシーベルトで、法令で定める年間被ばく線量限度の五〇ミリシーベルトを大きく下回っていた。低線量の被ばくだった。

美智子　体中が痛かったんでしょう。ベッドに触れると振動が響いて痛いと怒ってね。歯ぐきからの出血が止まらず、ふいてもふいてもあふれてくる。血がにじんだタオルを入れたごみ袋がいくつもできた。……私に甘えず、世話を焼くと怒っていた伸之が、亡くなる数時間前、ぎゅっと私の手を握ったんです。そして私の顔のマスクを一生懸命ずらそうとする。無菌室だからと元に戻しても、マスクをずらすのをやめなかった。最期に私の顔が見たかったんでしょうか。

解説者　浜岡総合病院で伸之さんを診察した小野七生（おのななお）医師。

小野医師　お母さんから、後に原発での被ばくとの関係を尋ねられたが、分からないと答えました。私が覚えている限り、彼と同様、原発作業員が血液の病気になったケースは数例ありましたが、低線量被ばくと白血病の因果関係を解明することは不可能に近いですから。

解説者　伸之さんは八一年春、中部電力の孫請け会社に就職。入社後すぐに浜岡原発へ派遣された。

解説者　原子炉内の計測装置の保守、点検が専門。

解説者　原子炉の定期検査の際、伸之さんは炉の下にもぐり、装置を取り外して調べる仕事をしていた。

美智子　原発は、コントロール室からコンピューターですべて制御している印象を私自身も持っていました。でも実際は最も大切な整備や検査は、伸之のような下請け作業員の手に頼っている。それなしに原発は動かせないんです。自分の責任を果たすため、誇りを持って働いている人が、被ばくし続けているんです。

解説者　原子力施設での作業員の被ばく線量は、放射線管理手帳に記載され、放射線従事者中央登録センターが一元的に管理している。

美智子　やっとの思いで手に入れた手帳は、至るところ訂正印だらけで真っ赤。ほとんど被ばく線量数値の訂正で、伸之が死んだ翌日のもありました。通院中だったのに健康診断の結果、作業従事可とされていたり、入院中にもかかわらず職場の安全教育を受けたことになっていたり……。白血病と診断される一年半前、白血球数が一万三千八百と、異常に高い記録がありました。それでも判定は『異常なし』でした。この手帳は、本当に伸之の役に立っていたのか。体に危険かもしれない放射線の数値がいくつも間違っていた。あの子は自分の本当の被曝量を知っていたんでしょうか。私には、企業が労働者の被ばくを管理するためだけの手帳のように思えるんです。

解説者　九四年七月末、労働基準監督署は申請を認め、原発での被ばくと病気には因果関係があると判断した。

解説者　だが中部電力は記者会見などで認定に対し、

中部電力　国の定める年間被ばく限度は五〇ミリシーベルト以下で、労災認定は被ばくと病気に直接的な因果関係があることを意味していない。

美智子　労災と認定されたのに、どうして電力会社は病気と仕事は関係ない、と言い切るのでしょうか。原発で働く若い人たちをこれ以上、あの子と同じ目に遭わせたくないです。

解説者　哲学者の森瀧市郎（もりたきいちろう）は原爆で右目を失った。

森瀧市郎　原子力の「軍事利用」すなわち原爆で、あれだけ悲惨な体験をした私たち広島、長崎の被爆生存者さえも、あれほど恐るべき力が、もし平和的に利用されるとしたら、どんなにすばらしい未来が開かれることだろうかと、いまから思えば穴にはいりたいほど恥ずかしい空想を抱いていたのである。

ウラン鉱山

解説者　日常的に被ばくをし続けているのは、原発で働く労働者だけではない。

森瀧市郎　私は一九七五年の春、南太平洋フィジーで開かれた「非核太平洋会議」に出席した。そのとき、そのオーストラリア原住民の娘さんが立ち上がって訴えたことがいちばん忘れられないのである。つらだましいのあるがっしりした身体の娘さん、シェリル・ブハナン嬢だった。

シェリル・ブハナン　ウラン鉱山は、私たちの祖先の聖地にあります。その聖地がとりあげられ、私たちの同胞の無知をよいことにして、私たちアボリジニはウラン採掘の最も危険な所で低賃金で働かされているのです。

解説者　オーストラリア、ノーザンテリトリー。

解説者　ここでウラン鉱山の採掘権料によって生活してきたミラー族のアボリジニたちと長老イヴォンヌ・マルガルラ。

マルガルラ　私たちは、おそらく世界最大の未開発ウラン鉱山であるジャビルカの開発に反対することを決めました。

ミラー族の民　ウラン採掘により土地は私たちから遠くなり、破壊されました。今は、汚染された岩が積み上げられ、毒を含んだ土に大きな穴があいています。先日地域を襲った大雨により、今ウラン鉱山には一〇〇〇トンの高濃度汚染水が閉じ込められています。あと一〇〇ミリの雨が降れば私たちの居住地にも流れだすでしょう。

マルガルラ　私たちはウラン鉱山から、日本円にして一七〇億円以上の採掘権料を得ています。しかし、鉱山の採掘は生活を完全にひっくり返し、アルコールへの依存とお金を巡る醜い争いを引き起こしました。私達は採掘権を放棄し、ウラン採掘を制限することを決意しています。

解説者　森瀧市郎の娘、春子（はるこ）は反核運動を引き継いだ。

森瀧春子　二〇〇一年に初めて、インド東部のジャールカンド州の奥地、ジャドゥゴダを訪れ、出会った子どもたちを忘れることはできない。

解説者　インド核開発を支えてきた、ジャドゥゴダウラン鉱山は、周辺に住む先住民に深刻な放射能汚染をもたらしてきた。

森瀧春子　農地を奪われ、ウラン鉱山で働かざるを得ない男たちの多くは、がんなどに侵され早死にし、多くの住民ががん、白血病、皮膚疾患に苦しみ、生まれて

くる子供たちには先天性障害が多発している。

ウラン鉱山労働者　ジャドゥゴダ鉱山に行き始めて一カ月目ごろから高熱が出てくるようになって……。我慢して働いたけど、二か月でどうにもならなくなった。産業医が「君の血は毒されてる」っていうんだ。僕には何のことか分からないよ。もうこの体じゃどうしようもない。家でじっとしてるだけだよ。

解説者　アフリカ大陸のウラン採掘の現場、ナミビアのロッシング鉱山で働いている重機のオペレーター、ヘネリック・アウェセブさん。

アウェセブ　夜寝ていると、胸に鈍い痛みを感じて息苦しくなることがよくあるんだ。作業中に吐き気に襲われ、気分も悪くなる。会社の医師は、たいしたことじゃない、というだけなんだ。あてにすることはできないよ。

解説者　ウラン回収工場で働くラインハルト・ノワセブさん。

ノワセブ　五年前、喉の病気で入院したんだ。でも今も、どこが悪かったかよく分からない。甲状腺が悪いらしいんだけど……。甲状腺って何？

解説者　たいていの労働者が、マスクも、放射線量を測るフィルムバッチもつけずに働いている。

ジェームズ・ディノ　会社から言われているのは、作業用眼鏡と靴の着用。それとショベルカーの窓を閉め切って、外に出るなってことさ。

解説者　厳しい差別と賃金水準のもと、彼らは放射線の影響についてはほとんどしらされていなかった。

解説者　世界第四位のウラン埋蔵量を誇るこのナミビアから、国連の輸出禁止布告を無視して、ウランが輸出されて来た。

解説者　輸出国の一つは日本である。

劣化ウランとプルトニウム

解説者　世界の人々に広がる放射線被曝は、原発事故、原発労働、ウラン鉱の採掘にとどまらない。

解説者　核エネルギーによる発電システム、全ての過程で人体に有害な放射性物質が作られ、増え続けている。

解説者　イラクで医療支援を続ける、ＪＩＭ（ジム）-ＮＥＴ（ネット）事務局長、佐藤真紀（さとうまき）。

佐藤　自然界にあるウランを天然ウランといいます。その中のウラン２３５は核分裂をして膨大なエネルギーを生み出すので、核兵器や原子力発電の核燃料に使われます。しかし、天然ウランはウラン２３５の濃度が低いのでその割合を増やさなければなりません。

解説者　その工程がウラン濃縮である。この技術はヒロシマ型ウラニウム原爆を作るための軍事技術の転用だ。

佐藤　天然ウランからウラン２３５を取りだした後の残りを劣化ウランと呼んでいます。劣化ウランも放射能を出し続ける危険な放射性物質です。劣化ウランその物に使い道はありませんが、危険なので簡単に捨てるわけには行きません。そこで、アメリカの軍需産業によって研究開発されたのが劣化ウラン弾です。

解説者　劣化ウラン弾、その威力と影響はどんな物だろうか？

佐藤　劣化ウランは非常に重くて、密度は鉄の二・四倍もあります。劣化ウラン弾は、硬い鋼鉄の戦車の装甲など簡単に貫通してしまいます。そして摩擦熱で発火し、一五〇〇度以上の熱を出して燃え上がり、劣化ウラン弾は溶け出します。この時、劣化ウランが細かい煙となって空中に飛散し風に乗って数千キロメートルも拡散します。そして呼吸などで人の体内に取り込まれることもあります。

解説者　劣化ウラン弾は一九九一年に起こった湾岸戦争で初めて使用された。

佐藤　湾岸戦争が終わって暫くすると、劣化ウラン弾が使用された地域のバスラの病院には、白血病などの癌の患者が増え始めました。一九九八年頃から急に増えています。小児癌患者は、今では戦争前の八倍になるといいます。また、先天性異常児や死産も急増し、これは湾岸戦争前の七倍です。お母さん達は、生まれてきた子供が男の子か女の子かという事よりも、異常があるか無いかを、まず確認しなくてはいけなくなりました。

解説者　劣化ウラン弾による放射線障害や重金属毒性の影響は、戦争の犠牲になる市民だけではない。従軍した兵士達にも現れている。

田城　私の取材した元米兵、マイク・ステイシーさんの家には貧困が忍び寄っていました。

解説者　湾岸戦争に従軍した兵士達とその家族のその後を取材している中国新聞の編集委員、田城明（たしろあきら）。

田城　マイクさんは、湾岸戦争での被曝が原因で健康を害し、除隊後に勤めていた郵便局をやめざるを得なかったのです。マイクさんは言います。

マイク　娘のためにも仕事は続けたかった。でも、体が続かなくて……

田城　オクラホマの田舎町で生まれ育ったマイクさんは、高校を卒業して二年後にショアンナさんと結婚、生活の向上と大学への奨学金が貰えるからと、四年契約で陸軍に入隊、戦車隊で劣化ウラン弾を装填する任務についていました。

マイク　劣化ウラン弾を使っているのは知っていた。でも放射能の危険性なんて全く教えられていなかった。

田城　駐留先のドイツで待つ妻子の元に帰ったとき、戦場で使っていた身の回りの品と一緒に、知らないまま放射性物質まで家に持ち込んでしまったのです。

ショアンナ　マイクの帰国直後から私達まで体調を崩してしまって。特に私は……

田城　ショアンナさんはそこまで言って夫と目を合わせ、意を決したように言葉を継ぎました。

ショアンナ　実はセックスのたびに、私の下腹部は燃えるような痛みに襲われていたのです。今でこそ、それが重金属で毒された夫の精液が原因だって理解していますが。

解説者　ショアンナさんの感じた下腹部の燃えるような痛み……それはバーニング・センセーションと呼ばれる健康被害だった。

ショアンナ　でも、劣化ウランについて調べている人と出会うまでは分からなくて……

解説者　腹痛、流産、月経時の激しい痛み、頭痛……劣化ウランを取り込んでしま

ったショアンナさんの体は徐々に蝕まれて行った。今では香水の香りでも気分が悪くなり、太陽光線にも皮膚が敏感に反応する……

解説者　マイクさんの体力も衰える一方で、下痢、関節や足の痛み、全身の倦怠感……これまでにカナダの放射線化学者が、二度彼の尿を検査し、いずれも劣化ウランが検出された。カリフォルニア州の民間医による血液検査では、重金属汚染と診断された。

解説者　だが、アメリカ政府はそれを認めていない。マイク・ステイシーさんが受け取る疾病・傷害年金も、戦争による心的外傷ストレス障害……ＰＴＳＤだけが理由とされ、月千ドル程にしかならない。

マイク　自分達には健康保険も貯金もない。だから、ひどい扱いを受けても退役軍人病院を頼るしかない。妻も含めて、治療をきちっとしてもらいたい。それが望みなんです。

解説者　田城明の取材は、湾岸戦争の同盟国、イギリスへと続く。湾岸戦争で被曝した帰還兵達の科学アドバイザーとなっている、サンダーランド大学名誉教授、マルコム・フーパー氏。

フーパー　一九九七年のことでした。四人の退役兵が私の研究室を訪ねてきました。働き盛りの一番元気な年頃の若者が杖をついてね。どこから見ても病人でした。

解説者　劣化ウランの粒子は、血液を通してリンパ節や骨にもたまり、免疫システムや血液を作る骨髄にも影響を与える。尿と一緒にわずかずつ体外へ排出されているのが、退役軍人達の尿検査からわかった。

フーパー　九年もたってなお検出されるのは、体内のいろいろな部位に劣化ウランが残っている証拠です。精子にも含まれることが分かっています。劣化ウランの持つ化学的毒性や、兵士が摂取した他の化学物質による影響で、精子を作る代謝の際に異常が起き、例えばアンモニアのような物質が多量に含まれてしまうのです。アンモニアは強い刺激性を有しています。その為に女性達は、バーニング・センセーション、下腹部に燃えるような激しい痛みを感じるのです。

解説者　そして田城は劣化ウラン弾の最大の被害地、イラクへと取材を進めた。バスラの小児科医、フィラス・アブダル・アバス医師。

アバス　ここにある写真は、六十七人の先天性障害のケースです。バスラ市内の病院で、一九九九年八月の一ヶ月で起きたものです。この赤ん坊は骨の異常。口唇・

口蓋裂、つまり唇や上顎が裂けているケース。この子は無脳症……脳が無くて生まれてきたのです。皮膚のない状態。首と頭の異常。これはアザラシ肢症（ししょう）と呼ばれる、足の骨がないケース……

田城　白血病などの癌で入院した子供達を取材したあとだけに、目の前の写真が一層心に重くのしかかってきました。アバス医師の説明を聞いている時、一人の看護師が小走りにやってきて言いました。

女性看護師　今、死産の赤ん坊を取り上げました。もし写真を撮るのでしたら、先生が良いと言っています。

田城　小児病棟から産科病棟への長い廊下を歩き、手術室に向かうと、父親らしい青年や肉親達が心配そうに廊下に佇んでいました。帝王切開で母胎から取り上げられた赤ちゃんは、脳が無く、手足の指はそれぞれ六本でした。手術を終えた母親は、寝台に乗せられ、すぐに病棟に運ばれました。夫妻は前回の出産でも同じ経験をしたのです。

モハメッド　なぜ、二度もこんな不幸が起きるのか、私にはさっぱり分からない。家族にも親類にも、先天性異常の者は一人もいないのに。私は退役兵です。戦争で命が助かったのはアッラーの御加護のおかげです。除隊してからは雑貨店をやって、大きな病気もしないで暮らしてきました。同い年の妻との間に、六歳を頭に三人の息子がいるけれど、今のところは元気ですよ。でも……原因は分からないけど、もう子供を作る勇気はありません。妻の回復と、三人の子が病気をせずに育ってくれるのをアッラーに祈るだけです。劣化ウラン？　そんな言葉は聞いたこともありません。

解説者　劣化ウラン弾は、湾岸戦争の後も、ボスニア紛争で、コソボ紛争で、アフガニスタンで、使用され続けた。そして、二〇〇二年のイラク戦争で、米英軍の劣化ウラン弾は再びイラクの人々に襲いかかった。

解説者　琉球大学理学部教授、矢ヶ崎克馬（やがさきかつま）。

矢ヶ崎　広島に落とされた原爆の一万四千倍から三万六千倍の放射能原子がペルシャ湾岸地方にばらまかれた。ウランの放射能半減期が四五億年であることを考慮すると、イラク、クウェートの住民は永久に健康被害に苦しめられるのである。

解説者　日本にも責任がある。

解説者　日本は発電用濃縮ウランをアメリカから輸入している。

解説者　この濃縮ウランを作る過程で、必然的に生み出される放射性廃棄物、それが劣化ウランだ。

解説者　原子力発電を続けるかぎり、劣化ウランは生み出され、劣化ウラン弾は増え続ける。

解説者　日本はアメリカと手を携えて、被曝者を世界中に増やしているのだ。

解説者　原子炉での発電過程では、さらに危険な放射性物質が生まれる。ウラン２３８は中性子を取り込んで、プルトニウム２３９に変わる。

解説者　このプルトニウムを核燃料として再利用しようという政策が、日本で採用されている核燃料サイクルだ。

解説者　科学ジャーナリスト、友清裕昭（ともきよひろあき）。

友清　日本は、国内のエネルギー資源が乏しいことから、プルトニウムを増殖させることで、エネルギー問題を解決しようとしています。その中心が青森県六ヶ所村（ろっかしょむら）の核燃料再処理施設と、福井県敦賀市の高速増殖炉もんじゅです。

解説者　科学史学者、常石敬一（つねいしけいいち）。

常石　もんじゅは試運転中の一九九五年に事故を起こし運転が止まっている。もんじゅは原型炉だ。実用炉として稼働し始めるまでに最短でも二〇年。もんじゅは、運転しなくても一年に百億円かかる。現在、世界中で動いている高速増殖炉は一つもない、

友清　使用済み核燃料の再処理技術は、原爆製造技術と本質的にはかわりありません。そのうえプルトニウムは、核兵器の材料としてはウランよりも適した面があります。このため、プルトニウムの利用が広がることは、それだけ核兵器を造る能力を持つ国が増えることを意味します。また、プルトニウムという物質それ自体の人体への影響は、ウランよりはるかに危険なため、取り扱いがより厄介です。

解説者　プルトニウムの毒性について、広瀬隆は「耳かきいっぱいで数万人を殺戮できる」と記している。

友清　欧米では、プルトニウム利用には消極的な傾向がはっきり見えています。そうした中で日本は、プルトニウム利用に本格的に取り組もうとしています。

解説者　日本の核燃料サイクルによるプルトニウム利用は、潜在的な核抑止力になっていると主張する人びとがいる。

解説者　日本はいつでも核武装できるというプレッシャーをある種の国々に与えることができるという主張だ。

解説者　しかしながら、日本各地のプルトニウム貯蔵施設は、むしろ通常兵器の攻撃によってさえ、核戦争クラスの深刻な放射能汚染をもたらしてしまう。

解説者　核燃料サイクルは、日本の防衛に寄与するどころか、極めて高い、潜在的な核汚染の危機を孕んでいるのだ。

常石　二〇〇八年現在、日本はプルトニウムを三十二トン持っている。長崎原爆に使用されたプルトニウムの量は六キログラムなので、五千三百三十三発分の原爆を作れる量となる。そうした国が、被爆経験を振りかざして核廃絶を唱えても説得力は乏しい。日本は核廃絶をいうなら、具体的な行動、核燃料サイクルの放棄が求められている。今ならまだ、再処理施設も、高速増殖炉も完成しておらず、本格稼働の目処も立っていない。断念を決断するなら今だ。

解説者　だが、核燃料サイクルを断念しても、原発の運転が続く限り、劣化ウラン、プルトニウムといった放射性物質の蓄積は終わることがない。

解説者　日本大学准教授、高橋巌（たかはしいわお）。

高橋　最大の問題は、私達人類は、この放射性物質という猛毒物質を無毒化する技術を持ち合わせていないし、持ち合わせる見通しも全く立っていないことです。原発の運転によって発生するプルトニウムの半減期は、約二万四千年に及びます。仮に事故がなかったとしても、原発の使用停止後、数万年もの猛毒物質の管理が求められるのです。しかも青森県六ヶ所村の再処理工場の稼働の目処が立たない現在、それらの行き場はなく、すでにあふれかえっています。

解説者　池澤夏樹。

池澤　放射性物質は、地球上の生物全てが日常で出会う毒とは原理が違います。フグの毒も、トリカブトも、ベロ毒素も、サリンでさえ焼却すれば消滅します。しかし放射性物質を熱で分解することはできません。

解説者　市民科学者、高木仁三郎。

高木　最終的に核兵器が廃絶されたとしても、我々は既に「核のない社会」に戻ることが困難であることを知っておかなくてはなりません。いったん生産されたプルトニウムは、消え去ることはなく、処分することもできないのです。いかなる形にせよ、永遠に管理し続けるしかありません。しかし、何十万年もの管理の間、貯蔵施設が天災や人為的破壊から守られ続けるという保障はないのです。

解説者　二〇〇九年四月、チェコ、プラハでの、バラク・オバマの演説。

オバマ　核兵器を使用したことがある唯一の核保有国として、アメリカには行動する道義的責任があります。冷戦はなくなりましたが、何千発もの核兵器はまだ存在しています。核兵器を保有する国家が増えています。核実験が続けられています。闇市では核の機密と核物質が大量に取引されています。核爆弾の製造技術が拡散しています。テロリストは、核爆弾を購入、製造、あるいは盗む決意を固めています。私達は、新しい基準を設定し、核物質を管理するための新たな秩序の構築に努めます。

解説者　オバマのプラハ演説はアイゼンハワーの「平和のための原子力」の二十一世紀バージョンとも言える内容だった。核廃絶を目指すと受け取られたこの演説も、その実は、核を持つ者が、持たざる者のプルトニウムを管理するという、アメリカによる核の中央集権支配、その第二章の始まりだった。

高木　確実におとずれることがはっきりしているものがあります。それは管理社会という事です。核物質、プルトニウムが大量に出回る社会が、厳しい管理を必要とするだろう事については、おそらくほとんどどんな立場の人も意見を一致させることでしょう。それは遠い将来の想像上のことではありません。

核管理社会

解説者　核による管理社会と中央集権支配は、日本にもある。

解説者　小出裕章

小出　原子力発電所を造る場合は、好き勝手にどこにでも作る事は出来ません。国の原子力委員会が定めた「原子炉立地審査指針」三条件に基づいて立地を選定しているのです。その三条件とは。

原子炉から一定の範囲内は「非居住区域」であること。その周りは、「低人口地帯」であること。原子炉敷地は「人口密集地帯から離れている」こと。

ではなぜ、絶対安全なはずの原発を、「過疎地」を選んで立地するのでしょうか。答えは、「大事故が起きた場合に、国と電力会社が支払うべき、賠償の総額を減らすため」です。

解説者　社会学者、宮台真司。

宮台真司　原発における「損害賠償法」と、莫大な交付金を与える「電源三法」、そして原発を過疎地に立地する「原子炉立地審査指針」の組み合わせから、分かることが二つあります。

一つは、過疎地は、過疎地だからこそ「交付金」が必要で原発を誘致するということ。もう一つは、原発誘致で交付金をもらっても、「賠償法」と「立地条件」とによって、「過疎地が過疎化から脱することははあり得ない」ということです。

このことが意味しているのは、原発を立地した過疎地に、「金はつぎ込むけど、絶対に過疎地のポジションから離脱させない」ということなのです。

解説者　福島第一原発には原発誘致に際して「福島を仙台にする」というスローガンがあった。

解説者　推進派は、交付金で豊かになって、福島も仙台のようになれるという夢をみた。

宮台　しかし残念なことに、福島が仙台になることはありえません。そもそも国が、絶対にそれを許さないんです。

解説者　都会で使う電力のために、都会に憧れる過疎地に夢を持たせ、その実、過疎地を過疎地のままに固定化してしまう。それが原発のシステムだというのなら、こんなあからさまな中央集権支配はない。

解説者　市民科学者、高木仁三郎は、こうしたからくりを三十年前に見抜き、警鐘を鳴らし続けていた。

高木仁三郎　原子力のような「中央集権型の巨大テクノロジー」を、国家や大企業

が保有すると、それ自体が「エネルギー市場」や「エネルギー供給管理」のうえで「大きな支配力」を保証します。それに対し、風力、バイオマス、太陽電池などは「地域分散型」のテクノロジーです。これらを軽視し、ほとんどの政府がまず「原子力」にとびついたのは、この「中央集権性」と「支配力」にあったと思います。

解説者　哲学者、高橋哲哉。

高橋哲哉　この問題は構造的には沖縄の米軍基地聞題に非常に似ています。「自分の裏庭には置きたくない」ものを「貧しい地域にお金で押しつける」、という点が似ているわけです。もちろん原発と違いはあります。沖縄の人々は米軍基地を誘致していませんから。しかし、「中心部が周辺部を犠牲にしてお金で片付けようとする差別的構造」は、基地問題にも原発問題にも共通しているように思うのです。

高木仁三郎　問題は、私たちが世界の民衆とどんな関係を結ぼうとするかという、私たちの姿勢の問題なのだと思います。広島や長崎の体験を受け継ぎ、語り継ぐことは、核の被害者と再びなることを拒否することであるとともに、再び戦争や侵略の加害者となることもはっきり拒否する地平に於いて可能となるでしょう。そして今、私たちは、「みずからの加害性」を直視すべき位置に再び立たされているのです。

解説者　ウラン鉱山で被害に遭った多くの先住民たち。

解説者　ネイティブアメリカンのナバホ族や、ポピ族。

解説者　カナダのデイネ、クリー族。

解説者　オーストラリアのアボリジニの人々。

解説者　インドの先住民。

解説者　ナミビアの人々。

解説者　日本が原発を輸出しようとしている国々。

解説者　ベトナム。

解説者　ヨルダン。

解説者　トルコ。

解説者　リトアニア。

解説者　劣化ウラン弾が落とされた国々。

解説者　イラク。

解説者　ボスニア。

解説者　コソボ。

解説者　リビア。

解説者　日米が国際的な使用済み核燃料の貯蔵・処分施設を建設しようとしている国。

解説者　モンゴル。

高木仁三郎　核は人間の生命と、その精神に対して支配性をもたざるをえません。核そのものの支配性、その支配性を利用する支配者・権力者たちの存在に反対すると言うことは、核の人間に対する支配と核を利用した権力支配に対して、人間の側の復権を主張することにほかならないのです。

解説者　今年の四月、西オーストラリア非核連合の集会が開催された。

解説者　西オーストラリア非核連合とは、西オーストラリアのアボリジニの人々と、彼らを支援するオーストラリア人によって結成された連合組織で、主に西オーストラリア州のウラン採掘を阻止することを目的として活動している。

解説者　その集会の終わり、日本人女性にアボリジニの長老たちが次々に声を掛けた。

アボリジニの長老１　私たちがしたことは本当に間違っています。

アボリジニの長老２　日本の皆さんに本当に申し訳ないです。

アボリジニの長老３　本当にごめんなさい。

解説者　アボリジニの土地を侵しているのは日本を含めた海外の大企業だ。それなのに彼らは加害者として心を痛めている。

解説者　西オーストラリア非核連合はこの集会の後、日本への連帯を表明した。

ＷＡＮＦＡ１　日本の皆様へ。

ＷＡＮＦＡ２　日本の東北、関東地方を襲った地震と津波、及び福島での原発事故が招いている惨事は常に私たちの胸中にあります。

ＷＡＮＦＡ３　日本の皆様に対し心からお悔やみとお見舞いを申し上げます。

ＷＡＮＦＡ４　また東京電力の原発の燃料となっているオーストラリアのウランが、皆さまの海水、水道水、食物連鎖、さらに皆さまの遺伝子までをも汚染してしまうであろうことを大変遺憾に思います。

ＷＡＮＦＡ５　地震や津波を止めることはできません。しかし核の脅威を止めることは可能であり、またなされなければいけません。

ＷＡＮＦＡ６　私たちは、西オーストラリア州のウランがこのような悲惨な被害を二度と引き起こすことがないよう、より一層努力することを固く誓います。

ＷＡＮＦＡ７　私たちはオーストラリアによるウランの輸出廃止を固く決意しています。ウラン採掘はオーストラリア国内で環境や文化を破壊するだけではなく、海外でも長期に渡る被害を引き起こします。

ＷＡＮＦＡ８　問題の無い状態でもオーストラリアのウランは放射性廃棄物になり、そして事故が起こると放射性降下物となってしまいます。

ＷＡＮＦＡ９　私たちは安全で再利用可能なエネルギー発電所の建設を推進し、オーストラリアのウラン鉱山廃止に尽力すると共に、日本の原子力発電所を停止するための皆さまの努力を支援することを誓います。

ＷＡＮＦＡ１０　私たちは日本がドイツの前例に倣い、原子力発電所を廃止することを要求します。今ならまだ手遅れではありません。

ＷＡＮＦＡ１１　私たちの国土は海で繋がっており、私たち両国民は過去に核爆発に

よる影響を受けたという歴史で繋がっています。

ＷＡＮＦＡ１２　そして何よりも、核の無い未来を望む心で私たちは結ばれているのです。

エピローグ

解説者　脱原発社会への提言。

解説者　事故が起こってしまったいま、もはやリアリティのあるなしを論ずる段階ではない。否応なくリアリティを持たざるを得なくなりました。

解説者　脱原発に行くしかないという現状認識が必要だろうと思います……ジャーナリスト、池上彰（いけがみあきら）。

解説者　三・一一以後、私たち日本人の意識が大きく変わったのを感ずる。科学技術の進展によって構築された高度産業社会が、うたかたの夢であったことを知らされた。

解説者　今、自然に対する畏敬の念を取り戻し、健康で当たり前の日常がどれほど大切なものかに気づいた……有機農業者、詩人、星寛治（ほしかんじ）。

解説者　二〇一一年三月十一日は、日本にとって明治維新、太平洋戦争敗戦に次ぐ、歴史的な「第三のリセット」の日になるでしょう。

解説者　そうしなければなりません……環境エネルギー政策研究所所長、飯田哲也（いいだてつなり）。

解説者　二〇一一年三月十一日に地球という星の日本という島国で起こった地球の仕業は、千年に一度の事だとも言われている。

解説者　この星にしてみれば「時々」のことかも知れないが、人間には世代を重ねないと過ごせない時間だ。

解説者　私たちは目の当たりにしたこの星の力を、千年先の地球に定住している人々に、世代を超えて伝えていかなければならない……アーティスト、日比野克彦（ひびのかつひこ）。

解説者　生き方のことまで考えたとき、思い浮かぶのはネイティブ・アメリカンの知恵です。

解説者　イロクォイ族という部族では、かつて、物事を決めるのに、七世代後の事を考えて決めていたそうです。

解説者　今ぼくたちが生きている社会は三ヶ月ぐらい先の物事しか見ていませんよね。

解説者三ヶ月単位で動くという私たちの社会の経済のあり方が、環境を破壊し、生活を破壊してきたのだと思います。これは変えていかなければいけません……音楽家、坂本龍一（さかもとりゅういち）。

解説者　亡くなってこの世にはいない方、子や孫、その先に生まれてくる命の話。どちらも、今はこの世には存在しない命の話だ。

解説者　古代から続く無数の命の連なりがあって、この自分の命があり、それがまたこれからの命につながっていく。

解説者　祝島（いわいしま）の人達は、その大いなる命のつながりに連なる者として、原発反対を選び続けている……映画監督、纐纈（はなぶさ）あや。

解説者　米も野菜も、東北の農民が首都圏の食卓をまかなってきた。夜のない東京の電気も、東北からである。

解説者　だが、日本人はアメリカかぶれをして輸入加工食品にかぶりつき、子供達を免疫力の弱い体にしてしまった。

解説者　「田畑が荒れれば心も荒れる」を肝に銘じて、地方住民も都市住民も、ともに再生のために歩んでいこう……有機農業者、菅野正寿（すげのせいじ）。

解説者　原子力発電が「平和利用」などと言われながら、大量殺人を目的とする核兵器生産と一体であることは、核兵器の原料が原発で造られている事実を指摘するだけで十分なはずです。

解説者　人類が「核と共存できる」というのは思い込みにすぎません。

解説者　「思い込み」というより、その事によって利益を得る人びとによって「思い込まされている」、つまり洗脳されたという事です……ジャーナリスト、宇宙飛行士、秋山豊寛（あきやまとよひろ）。

解説者　これまでは「原発推進は国策であるから正しい。脱原発は反体制であるからよくない」というはっきりした区分け、ある種の壁がありました。しかし、今回の事故によって、そうした壁は崩壊しました。

解説者　国土も山河も放射能で汚染されてしまった現状を見ると、脱原発とは国土や自然を守ることであり、反体制どころか、保守の考えかたその物だとすら言えるでしょう……東京都世田谷区長、保坂展人（ほさかのぶと）。

解説者　三・一一までの日本は、世界に対して「唯一の被爆国」という大義名分を掲げ、世界に対して反核を訴えることができた国でした。しかし、この事故対応以降、その立場は完全に崩壊しました。

解説者　既に日本は世界に前例のない放射能汚染を発生させた「国際的な犯罪国家」であり、その一員にほかならない加害者です……日本大学生物資源科学部准教授、高橋巖（たかはしいわお）。

解説者　「万が一の危険は？」「想定以上の危機に対しては？」という問いに対して、「ありえないことは、考えないことにしています」という思考停止を、わたしたちは許してきた。

解説者　この気分は「負けることは、考えないことにしています」と思考停止のまま、敗戦へとつきすすんだ戦時中の日本を思い起こさせる。

解説者　八・一五と三・一一とに、日本は二度の敗戦を迎えた。一度目は、みずからのおろかさによって。二度目もまた、みずからのおろかさによって。

解説者　「何もしなかった」ことは無罪ではない。「不作為の罪」という罪なのだ……社会学者、上野千鶴子（うえのちづこ）。

解説者　いまこそ「大きな怒り」から行動を起こさなければいけないときでしょう。

解説者　ここでひるんでいては、私たちは子どもたちに、孫たちに、一生、そして私たちが死んでからも、顔向けができないことになるかもしれない。

解説者　それはこの状況を許してきた私たちの自己反省の運動であり、「空気」に屈することなく、私たちに日本人が自律した自己を確立する運動でもあるのです……文化人類学者、上田紀行（うえだのりゆき）。

解説者　ただ、知ってしまったのだ。原発は、自然とは対極にある。人間の力で制御できる範囲をはるかに超えたものが原発だった。

解説者　自然を超えたものと人間は共存できない。そんなものがもたらす金が、われわれを豊かにすることなどありえない。

解説者　とすれば、選択肢は別に考えねばならない。ようやくいま、そのスタート台に立ったのだ。遅くはない。歩き始めなければならない……編集者、ライター、鈴木耕（すずきこう）。

解説者　原発の代替案とは何か、それは原発をもたないことである。椅子に座っている人を想像してみてほしい。

解説者　それは快適で、豪華な椅子だ。ただ一つだけ困ったことに、その椅子の下にはダイナマイトの箱があって、点火された導火線につながっている。

解説者　誰かが言う、「そこにそうやって座っているのはよくないと思うんだけど……」座っている人がそれにこう答える。「じゃあ、代替案は？」。

解説者　そう、椅子に座ることの代替案はもちろん、椅子に座らないこと。原子力の代替案とは、そういうことなのである……政治学者、ダグラス・ラミス。

解説者　それならば、進む方向を変えよう。「昔、原発というものがあった」と笑って言える時代のほうへ舵を向けよう。陽光と風の恵みの範囲で暮らして、しかし

何かを我慢しているわけではない。

解説者　高層マンションではなく、屋根にソーラー・パネルを載せた家。そんなに遠くない職場とすぐ近くの畑の野菜。背景に見えている風車。

解説者　アレグロではなくモデラート・カンタービレの日々。それはさほど遠いところにはないはずだと、この何十年か日本の社会の変化を見てきたぼくは思う…

…作家、詩人、池澤夏樹（いけざわなつき）。

幕

【引用文献】

○フクシマ

日本チェルノブイリ連帯基金会報『グランドゼロ』第88号

『低線量被曝の人体の影響について』(http://smc-japan.org/?p=1627)

山下俊一・高村昇「放射線と私たちの健康との関係」講演会　於・福島市(2011年3月21日)

○原発と地域振興

内橋克人著『日本の原発、どこで間違えたのか』(朝日新聞出版)

開沼博著『「フクシマ」論　原子力ムラはなぜ生まれたのか』(青土社)

○安全神話

広瀬隆著『東京に原発を！』(集英社文庫)

頼れる仲間プルト君―プルトニウム物語 (http://www.youtube.com/watch?v=bJlu101TroY)

電気事業連合会　第20回原子力部会資料４　原子力発電の推進に向けた取り組み (2009年5月)

NHK「東海村臨界事故」取材班編集　『朽ちていった命―被曝治療八三日間の記録―』(新潮文庫)

原子力安全委員会　ウラン加工工場臨界事故調査委員会　報告の概要

(http://www.aec.go.jp/jicst/NC/tyoki/siryo/siryo05/siryo52.htm)

高木仁三郎著『市民科学者として生きる』(岩波新書)

大朏博善編『放射線への健康の影響』(WAC)　碧海酉癸、木元教子、東嶋和子著

『私たちはなぜ放射線の話をするのか』(WAC)

キャサリン・コーンフィールド著、友情裕昭訳『被曝の世紀』　(朝日新聞社)

『朝日ジャーナル　週刊朝日緊急増刊　原発と人間』(朝日新聞出版社)

池澤夏樹「落胆して泣いて：　良き貧しき国の再生を」より

『朝日ジャーナル　週刊朝日緊急増刊　原発と人間』(朝日新聞出版社)

高橋哲哉著「原発という犠牲のシステム」より

小出裕章著『原発のウソ』(扶桑社新書)

○原発労働者

隠された被爆労働～日本の原発労働者 (http://www.youtube.com/watch?v=92fP58sMYus&sns=em)

福島みずほ対談１２　樋口健二『原発労働者の実態』(http://www.youtube.com/watch?v=U73WCbZqD2s)

樋口健二シンポジウム『そこで働いているのは誰か――原発における被曝労働の実態』

於・東京 (2011年6月4日　主催：アジア太平洋資料センター)

堀江邦夫著『原発ジプシー―下請け労働者の記録』(増補改訂版)(現代書館　2011)

ICBUW、嘉指信雄、振津かつみ、森瀧春子(編集)

『ウラン兵器なき世界をめざして―ICBUWの挑戦』(NO DU ヒロシマ・プロジェクト)

中国新聞「ヒバクシャ」取材班著『世界のヒバクシャ』

森瀧市郎『核絶対否定への歩み』(http://www.gensuikin.org/data/mori1.html)

○ウラン鉱山

エコロジーオンラインニュース【オーストラリア発】

アボリジニがウラン採掘に反対 (http://www.eco-online.org/)

○劣化ウランとプルトニウム

佐藤真紀著『戦火の爪あとに生きる―劣化ウラン弾とイラクの子どもたち―』(童話館出版)

田城明著『知られざるヒバクシャ―劣化ウラン弾の実態―』(大学教育出版)

矢ヶ崎克馬『平和運動　1997年7月号』所収『放射能兵器劣化ウラン』(日本平和委員会)

(『イラク―湾岸戦争の子どもたち―』森住卓著　高分研　よりの孫引き)

常石敬一著『原発とプルトニウム―パンドラの箱を開けてしまった科学者たち―』

(PHPサイエンス・ワールド新書)

友清裕昭著『プルトニウム―超ウラン元素の正体―』(講談社ブルー・バックス)

高木仁三郎著『プルトニウムの恐怖』(岩波新書)

広瀬隆・藤田祐幸著『原子力発電で本当に私たちが知りたい120の基礎知識』(東京書籍)

○核管理社会

宮台真司×小林武史対談『世界の手触りを失うな』

(http://www.eco-reso.jp/feature/love_checkenergy/20110714_5096.php)

高木仁三郎著『核時代を生きる』(講談社現代新書)

○エピローグ

池澤夏樹・坂本龍一・池上彰ほか・著『脱原発社会を創る30人の提言』(コモンズ)